



週1回のゴミ回収日。黒いゴミ箱が通りにズラリと並ぶ。

自動車メーカーに勤務していた松浦氏が英国に移り住んだのは3年前。日々の生活の中から、クルマとその周辺に関する話題を切り取ってお届けする。



第28話……

スペース

日

本から、若き学者一家が『6カ月の短期留学』とかでイギリスにやって来た。彼は私の友人の弟子で、マローウのわが家へ一家で遊びにきた。

5歳と1歳の子連れだといつので、近くの駅までクルマで迎えに行った。5歳の女の子は途中、牧場に沢山の牛がいるのを見て大感激していた。「イギリスの生活は楽しいかな?」という私の質問に、その若き先生はこう答えた。

「レンタカーを借りて、ストラットフォード・アポン・エイヴォンまでドライブしたのですが、途中の景色の美しいのに驚きました。日本の高速道路は、周囲が壁だらけです。溝の中を走っているようで、あんな眺めのよさはありません。景色を眺められるだけで、ドライブがあんなに楽しくなるとは思っていませんでしたよ」

わが家で昼食を済ませてから、近所を見たいといつので『シーモア通り』を案内すると、今度は若き奥様の方が驚きの声を連発した。「その角の家、庭が広そうですが……」



ゴミ回収車は自動的にゴミ箱を持ち上げる。

「この家で5000坪ぐらいかな、シーモア通りの家は全部で55軒あって1軒の例外的ほかは、だいたい敷地面積は2000坪から8000坪の間でしょう」

「まあ、そんなに」
「わが家は小さい方で2500坪です。でも、ひとり世話をするには、これが限界ですよ」

「2500坪って、800強でしょう。日本なら家が5軒も建ちますわ」
「例外といった1軒は、この通りの端の家で、ゴルフコースが3ホールは作れる大きさですよ」

あまり日本の現実からかけ離れた実例ばかりを紹介するのも気がひけ

て、話題を万国共通のゴミ問題に切り替えてみた。

「生ゴミは、たいがい家では庭の片隅に穴を掘って、そこに捨てます。これは貴重なコンポスト(堆肥)になるのです。生ゴミ以外のゴミは、官製の黒いゴミ箱に入れて、週1回の回収日に表に出しておきます」

「……日常的に出る粗大ゴミは、近くに捨て場があるので、自分たちのクルマで運びます。それで運べないような超粗大、超重量ゴミなら専門処理会社へ電話するのです。鉄製の大きなワゴンを運んでくれますから、そこへ積み込んでおく、再びやってきて、それを持って行ってくれるというわけです」

話しているうちに、なんでゴミの話をしているのかわからなくなってきた。

「近くにゴミ捨て場があるなんて、やっぱり土地に余裕があるからですね」と、どこまでも話しはそこに落ち着いてしまつた。

日本での生活でイギリスでの生活何が変わったかと考えると、言葉とか食物とか習慣とか、枚挙にいとまがない。しかし、いちばん大きな違いといえば、人間ひとりに与えられたスペースの問題だろう。



ここが粗大ゴミ捨て場。ゴミの種類を分別して捨てるようになっている。



日本ではあまり見ない“超”粗大ゴミ運搬車。

若き先生がイギリスでのドライブを楽しんだことにしても、過密な住宅街を高速道路が通らなくてはむだめ、防音壁の必要性がないからだ。そして、スペースにゆとりがあるから、われ先に、という気持ち起きない。だから、人間同志の気持ちよいマナーが守られる。片側4車線・往復8車線の高速道路ならば、大型トラックの運転マナーがよくなると言つてもいい。

日本人よりイギリス人のほうが人間的に優れている、などとは決して思わない。ただ、彼らには日本人の8倍ものスペースがある。過密な世界は、個体間の干渉が大きく、理性の働かない動物の世界では殺し合いさえ起きる。トラバガニの世界がいい例だ。

人間界では、スペースが少ないことで殺し合いは起きないにしても、人心をゆとりなき方向にひきずってゆく。無意識のうちに人生の楽しみ方に影響を与え、国民性まで規定してしまうこともある。

スペースにはわれわれが気が付かないような、コワイこわい問題が潜んでいるような気がする。